

土木屋の読書と旅(12)

令和2年11月

“外出自粛でも旅をする方法はある。脳内旅行である。”と前回書いたが、安直なTV旅番組の活用以外ではどのような方法論（脳の働かせ方や遊び方）のバリエーションがあるのだろうか。

沢木耕太郎は近著『旅のつばくろ』をこういう書き出しで始めている。『ある時期までの日本では、ハワイへの旅が「夢の旅」の代名詞になっていた。……現代では、例えばどんなに遠くであっても行って行かないことはなくなってきたという意味において、「夢の旅」は空間ではなく、時間を超えた旅、過去への旅ということになるのだろうか』『いくら訪れたことがあるといっても、その土地について「知っている」とまでは言えない。なぜなら多くが移動の旅であり、……点として（せいぜい線として）そこを知っているだけで面としてそこを知っているわけではないからだ。』

そして、今回の方法論は決まった。私の住民票があった県外唯一の都市・京都を追憶する旅である。

* * *

私にはこんな記憶がある。昭和50年頃の春、夜半の薄暗いプラットホームの向こうから寝台列車の煌々と輝くヘッドライトが近づいてくる。熊本発京都行の寝台急行「天草」である。「天草」は3段寝台の列車で、防府駅を23:39発車し京都には08:33到着するため、上京時にはよく利用した。3段寝台はさすがに狭く、乗車後は横になるほか方法はない。うつらうつらするのは岩国駅ぐらいまでで、目が覚めるのは大阪駅を通過するあたり。通路横の車窓から線路右側に東寺の五重塔が見えてくると間もなく京都駅到着である。駅前には古都の雰囲気をはほとんど感じさせない、仏壇ろうそくのような京都タワー、観光物産デパートやビジネスホテル法華倶楽部（当時の風景）が出迎えてくれた。ただ、グリーン系にオレンジの帯の路面電車だけにはいつも京都に戻ってきたことを感じる事ができた。十数年後に、この路面電車が広島路面電車として活躍している雄姿をみた。



京都駅前には路面電車やバスの乗車場があり、市街地の主要な都市軸を構成する烏丸通（“からすまどおり”と読む。“からすまろ”と読むと田舎者といわれた）が北に向かって伸びている。駅前の東西軸は塩小路でその北が七条通、過ぎると左手に東本願寺がある。私の下宿先は（6年間同じ）方形都市の北東郊外左京区上高野にあり、京都の表鬼門（東北）比叡山が間近かに迫るところで修学院離宮にも近い宝ヶ池バス停まで、いつも市バス「5番岩倉行き」で帰っていた。ちなみに裏鬼門（西南）を守るのが岩清水八幡宮（八幡市在、源氏の氏神でもあり徒然草第五十二段の話で登場する）。下宿の側を通る旧道沿いの町並みで、比叡（延暦寺）の修行僧が数名づつ冬でも素足に草鞋で托鉢に歩く姿を幾度となくみた。現代の風景の中では「異形」といえばそういえるかもしれない、ひとつの極端である。

* * *

当時不思議に思ったことが2つあった。京都の原型である平安京は中国洛陽、長安を模した碁盤の目（グリッド）状の都市と思っていた、否そう教わっていた。ここで2つの不思議である。駅前から北に向けて市バスに乗るとすぐわかることであるが、メインストリーの烏丸通は北大路のさらに北の今宮通までまっすぐ走るが、



土木屋の読書と旅(12)

令和2年11月

東本願寺の前だけ東側にぐにゅと曲がっていること。また、東寺や東本願寺がなぜメインストリート烏丸通の西側にあるのか？



答えは意外に単純明快、高校の日本史教科書では分からないが、都市の歴史が分かれば納得のいく結果であった。まず、烏丸通が東本願寺前だけぐにゅと曲がっているのは『むかし市電を敷設するときに、東本願寺の正面前を電車が走るというのは無礼ということで迂回させられたのだ。お茶やお花の家元とならんで、白足袋の権勢はかくも大きかった。』（京都の平熱」鷲田清一：講談社学術文庫』ということである。つぎに、東寺や東本願寺がなぜメインストリートの烏丸通の西側にあるのかである。そもそも私が当時なぜそう感じたのかを話すと、烏丸今出川から烏丸丸太町にかけて東側は京都御所に接しており、現在の烏丸通をその道幅や位置づけからグリッド都市の中心大路（朱雀大路）と誤認したことに起因している。では平安京としての朱雀大路はどこにあったのか。これは地図をよく見ないと分からないが、二条城の西を南北に走る現在の「千本通」が答えである。

* * *

この解答を理解するには京都の都市形成史が必要になるので、少し長くなるがもう一度『京都の平熱（鷲田清一）』から引用したい。

『千本北大路。ここを下がると、千本通が九条の羅生門跡まで通じ、…全長およそ十七キロの路である。…じつはこれがかつての平安京の中軸をなす朱雀大路とその延長だったからである。…平安京の正門である羅城門跡が千本九条にあたり、大極殿の跡が千本丸太町の西にあたりするのを訝しくおもうひとは多い。京のメインゲートや正殿がどうしてこんなに西に外れたところにあるのか、と。』

さらに羅城門跡の西には、東寺と対をなすように「西寺跡」がある。したがって、「東寺」が烏丸通の西側にあるのは当然の結論になるが、「東本願寺」の場合は違う。そもそも「うぐいす鳴くよ平安京」は794年のことで、この時代浄土真宗は開宗されておらず、本願寺派の教団自体が存在していない。「東本願寺と西本願寺」の経緯については『詳説 日本史研究』山川出版によればつぎのとおりである。



『織田信長は…1580（天正 8）年、石山本願寺（大阪）を屈服させ、顕如を石山（大阪）から退去させることに成功した。…退却決定に対し、父顕如と長男教如が対立した。…その後本願寺は豊臣秀吉のときに京都堀川に移されたが（西本願寺）、顕如が死去すると教如は本願寺門主の座を弟に譲り隠居。その後、教如は徳川家康から京都七条烏丸に別の寺が与えられ（東本願寺）ここに本願寺は東西両派にわかれることになった。』

要するに、本願寺派と大谷派の本願寺がその位置関係から「お西」「お東」と呼ばれるようになったのであり、朱雀大路の位置とは関係なく、東・西の呼称は都市構造にも関係なく相対的なものである。

都市構造の変遷を理解することは京都人の心情心理を理解することにも通じる。たとえば「洛中・洛外」の概念であり、『京都ざらい（井上章一：朝日新書）』には嵯峨（洛外）に生れた者が洛中の京都人

土木屋の読書と旅(12)

令和2年11月

へもつ葛藤、怨嗟があふれている。この伝でいけば周防の国から上京してきた私は化外の民ということになり、洛外の人々の心情は分からないでもないが、その微妙な心理の綾は当時分からなかった。『京都の平熱（鷲田清一）』では京都人のきわもの好き、新しもん好きをこう説明している。『他所では受け入れられそうもない脱俗のひと、超絶的な人を、あるいは「奇人」を、そして志士を、この街はどんどん迎え入れてきた。…そしてそのことで街として生き延びてきた。そのカオス的ともいえる内部への増殖運動を停止すれば、この街はたぶんすぐにその生命力を枯渇させてしまうに違いない。』このことは古都「奈良」と対比すればわかりやすい。その京都という都市の変遷を同著からたどるとつぎのとおり。

『平安京はまず京を南北に貫通する朱雀大路を軸に、東西に二つの区域が設定された。左京と右京であり、唐風の呼び名で、左京は「洛陽城」、右京は「長安城」とも称された。しかし、右京は左京とくらべ湿潤な低地で、沼や泥地が多く、平安時代の後期ともなると、すでにその衰退は目に余るものとなった。設置された大路も次第に崩れ、元の農村に戻っていった。京都が洛中・洛外という風に「洛」で表されるのは、都の中心域が「洛陽城」になったからである。

平安京は左京を中心に北と鴨川を越えて東山まで延び、やがて応仁・文明の乱や秀吉による大改造によって整備が加えられる。この間、京都の大きな区分は、朱雀大路を軸とする左京・右京の東西区分から、二条大路を分岐点とする上京・下京の南北区分へと変化していった（「京都の大路小路」森谷尅久監修および「京都の平熱」を要約）。』

ここでいう秀吉による大改造とは「御土居」のことであり、土塁と堀で京都のまわりをぐるりと取り囲んだ巨大な都市城塞壁のことである。そして、御土居堀の内側を「洛中」、外側が「洛外」とされた。



秀吉が目指した城下町

* * *

私が6年間暮らした京都市左京区は、今思えば学生に甘い街だったと思う。その一方で『京都は「着倒れ」の街といわれているけれど、ほんとうは「気倒れ」の街だ、と言った人がいた。（「平成の平熱」）』

京都人の気質についてよく例えられるのが「京の茶漬け」の話である。『何かの用事でよそ様のお家にお邪魔して、話もすんで帰ろうとしたところ、「ぶぶづけ（茶漬け）」でもいかかがどすか？と勧められた。せっかくだからと御馳走になって帰ったら、後で、「あのひとは礼儀知らずやなあ」と陰口を言われた。京都人は意地悪だ、との説明によく使われる話だ。（「古都再見」葉室麟：新潮文庫）』

私も家庭教師先のお宅で夕食を勧められた。「ぶぶづけ」の話はすでに知っていたので固辞すると、奥さんが「お兄ちゃんは学生はんやさかい気にせんでよろし（この京言葉づかいは怪しい）」と一蹴された。その後毎回夕食を頂くことになり、ご主人には祇園の小さなバーへも連れて行ってもらったことがある。

* * *

京都（関西）の大学生は自分の学年を何回生という。たとえば“〇〇大学3回生の誰々です”という。「季節が巡るごとに生まれ変わって成長しています」というような語感に学生としての気概と自負心を垣間見ることができる（考えすぎか？）。田舎から上京したての学生が京都の賑わいを求めて日曜日にぶらつく街は河原町三条から河原町四条界隈が多かった。若い女性が多い人混みと本屋と娯楽施設が集中

土木屋の読書と旅(12)

令和2年11月

している一区画であるが、文学好きの学生は二筋西の風情ある寺町通りを好んだ。二条通から寺町通りを下り、蛸薬師通で曲がって河原町通りへ出るとそこに丸善がある。梶井基次郎の名作『檸檬』の主人公が彷徨したコースである。もっとも、小説『檸檬』には彷徨コースが具体的に書いてあるわけではなく、書かれているのは二条通の角から入った寺町通りの八百屋でレモンを買い、形而上学的に悶々と思索しながら『何处をどう歩いたのだろう、私が最後に立ったのは丸善の前だった。』までである。そして小説はクライマックスを迎える。『「あ、そうだそうだ」その時私は袂の中の檸檬を思い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみたら。「そうだ」…その奇妙なたくらみは寧ろ私をぎょっとさせた。…丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けてきた奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだろう。そして私は活動写真の看板が奇体な趣で街を彩っている京極を下って行った。(1924年10月)』(傍点筆者加筆)

梶井基次郎

檸檬
れもん



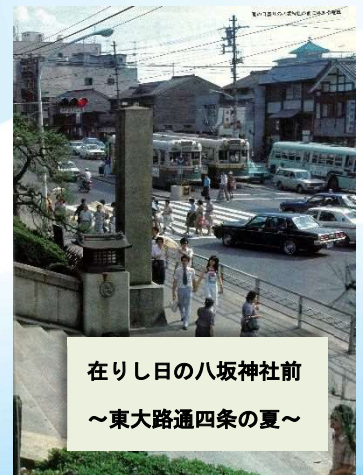
ここで問題が一つ発覚した。私もこのコースを歩いたわけであるが、『古都再見(葉室麟)』では丸善京都は明治五年二条通柳馬場東に開設、寺町通小路上がるへ移転、京都支店閉店、明治四十年三条通麩屋町に再開設、その後河原町蛸薬師へ移転という経緯をたどったことが記されており、『…梶井が訪れたのは三条通麩屋町の丸善だ。京都の丸善は平成十七年にいったん閉店した。このとき、文学ファンたちが閉店を惜しみ、「檸檬」を真似て店内にレモンを置くのが話題になった。』とある。つまり、私が目指した丸善(河原町蛸薬師)は梶井基次郎が立ち寄った丸善ではなく、一部違うルートを歩いたことになる。地図で調べてみると、二条通寺町から三条通麩屋町ではあまりに近すぎる。『それから(レモンを買った八百屋から)の私は何处へどう歩いたのだろう。私は長い間街を歩いていた。』の文章表現は懊悩の深さゆえの

虚構の長さだったのだろうか。確かに、小説は『そして私は活動写真の看板が奇体な趣で街を彩っている京極を下って行った。(1924年10月)』で終わっているのに、通りの繋がりから三条通麩屋町の丸善であることは間違いないのであろうと思うが。

* * *

今回の追憶の旅では学生時代によく通った二番館の映画館「京一会館(叡電一乗寺駅近く)」や「祇園会館(八坂神社前)」にも記憶をつなげたかったが、若き日の宿題を調べなおすことで終わった。新型コロナ禍がもう少し収まればひさしぶりに京都に行ってみようと思う、2冊の本を読み終えた後で。

『京都・六曜社の三代記 喫茶の一族』樺山聡・他：京阪神エルマガジン
『佛具とノーベル賞 京都・島津製作所創業伝』鵜飼秀徳：朝日新聞出版
古谷 健



在りし日の八坂神社前
～東大路通四条の夏～